

交流紙 <農>の心 <暮らし>のきずな

第4号(その1) (2012年4月3日発行)

3月26日(月)から31日(土)まで岩崎は宮城県を訪れました。佐々木さんのナビゲートで各所を回りました。今回は27日の東松島市、石巻市の行程です。

(その1) 津波被災地を訪ねて

東松島市矢本立沼地区 菅原さん

津波をかぶった農地に客土。今年、ハウス3棟の再建をめざす。

朝、古川を発って、東松島市の菅原さんを再訪した。氏は、自宅周辺の畑に客土を入れ、これから植え付けるカリフラワー「ダ・ヴィンチ」、ネギ、じゃがいもなどの種苗を作っておられた。昨年借りた畑30aのほか、今年は自分の農地でハウス3棟の再建・収穫をめざすため、客土(10cm)の最中である。ただ、水は井戸も川(上流除塩)も塩にやられているので水道水に頼らざるをえない。



自宅は、矢本を震源とする2003年宮城県北部地震の後に建て替え、盛り土をしていたために、今回の津波では床上10cmの浸水ですみ、3世代の家族は無事で今もそこで暮らしている。菅原さん本人は、地震当日、改良区の施設点検に回っていて津波に襲われたが、軽トラックの屋根から木にとび移り九死に一生を得た。



息子さんは気仙沼などで震災泥水排出の作業に従事している。

立沼区では、集団移転の具体化の真最中である。5戸以上の同意で集団移転できるようになったので、結果的に数十戸の農家は移転組と残留組に分かれる。宅地、農地の単価が提示され始めている。

農地は、震災前からの基盤整備・大区画化の要望が事業化されることになり、現在、上流から除塩中。さいわい40歳代の農業リーダーがいて、法人化に積極的であり、再生の主体ができそうである。ただ集落として歯抜け状態になり、とくに子供がいる若い世帯の多くが移転組なので、「うちの孫はさみしがらう」と菅原さんは心配する。

大曲地区の方でも、基盤整備事業は立沼より1年先行し、5,6人のリーダーもいて、法人化と農地分合を進めようとしているようだ。

東松島市のHPからは、市の復興計画の策定と実施は比較的順調に進んでいるように見える。

再訪を約して、菅原さん宅をあとにした。

石巻市

市街地中心部は復興が進んでいる。

石巻市に入ると、郊外には無人の廃墟となった家屋が立ち残っている。市街地中心部では、浸水1m前後という被害を感じさせない形で営業が再開されている。石巻には「石巻気質」があって独立心が強いという。選抜での石巻工業高校の力強い選手宣誓が思い出された。



石巻市（旧河北町、旧北上町）

大川小学校、北上総合支所の悲劇

北上川沿いにある大川小学校や十三浜に向かった。来る前に金菱清編『3・11 慟哭の記録』（新曜社）などを読んでいたので、現地を訪ねてみたいと思ったのである。

大川小学校は、北上川の堤防の下の窪地のような所に建っていた。鎮魂供養の壇が設けられ、おまいりに来る人たちが三々五々続いていた。われわれも児童 74 名、教職員 10 名の冥福を祈った。



窪地の底から周囲をみわたすと、海の方は地形にさえぎられて見えず、堤防も高い。海や川に何が起こっているのかは全くわからない。背後の山はやや急で小学生を初めて登らせることはできそうにない。上流に避難の目安になる施設もなさそうである。そのような条件の中で 30 分も運動場で待機してしまい、津波にのまれたのである。

道路を堤防まで登り、背後の山の裏側に回り込み、川から離れるように歩いて逃げるしかなかったであろう、と推測するのである。

大川小学校をあとにして北上川の鉄橋を渡る。下流域も津波に洗われていた。

「此の月浜地区の北上川沿いの吉浜、追波、釜谷崎集落では、（河口から）約数キロ上流にも拘わら

ず集落の 9 割以上の家屋が流失・全壊となり、250 名以上の人命が失われたのであるが、月浜より上流以上の集落は古来より津波とは全く縁のない所だとの言い伝えのあった事が、今回の人的被害を増幅させた最大の原因と見られている」（住民佐藤清吾氏の記録（金菱編、掲載））。



河口に向かうと吉浜小学校、北上総合支所があった。内部全滅という状態である。3 階までやられた小学校は卒業式準備のため 5 名の児童と 10 名の教職員しかいなかったため、狭い屋上に逃げかろうじて助かった。北上支所の方は避難所指定となっており児童 7 人を含む 54 人が亡くなった。

北上総合支所は、5 年前の石巻市への合併に際して建てられたものであり、「万が一の津波がないとは云えず、それに備えて地盤を上げて海拔 6.5m の地盤に頑丈なコンクリート 2 階建ての庁舎が建ったのである。目の前の国道 398 号線には水面から 5m の防潮堤が 1 年前に完成したために、地区住民も行政も、此处を万一の避難所として指定して備え、万全と信じ切っていたのである」（同上）。

石巻の事例と対照的な位置にあるのが「釜石の奇跡」である。津波にのまれた鶴住居小学校と釜石東中学の生徒約 570 名が全員無事避難したというものである。8 年前から、群馬大学片田敏孝教授の「3 原則」のもとで防災教育・訓練を積み重ねてきた。すなわち、①想定にとらわれない、②その時の状況下で最善を尽くす、③自ら率先して避難する、である。

石巻と釜石の事例の中から、今後の教訓を導かなければならないと、深く思うのである。

（続く）